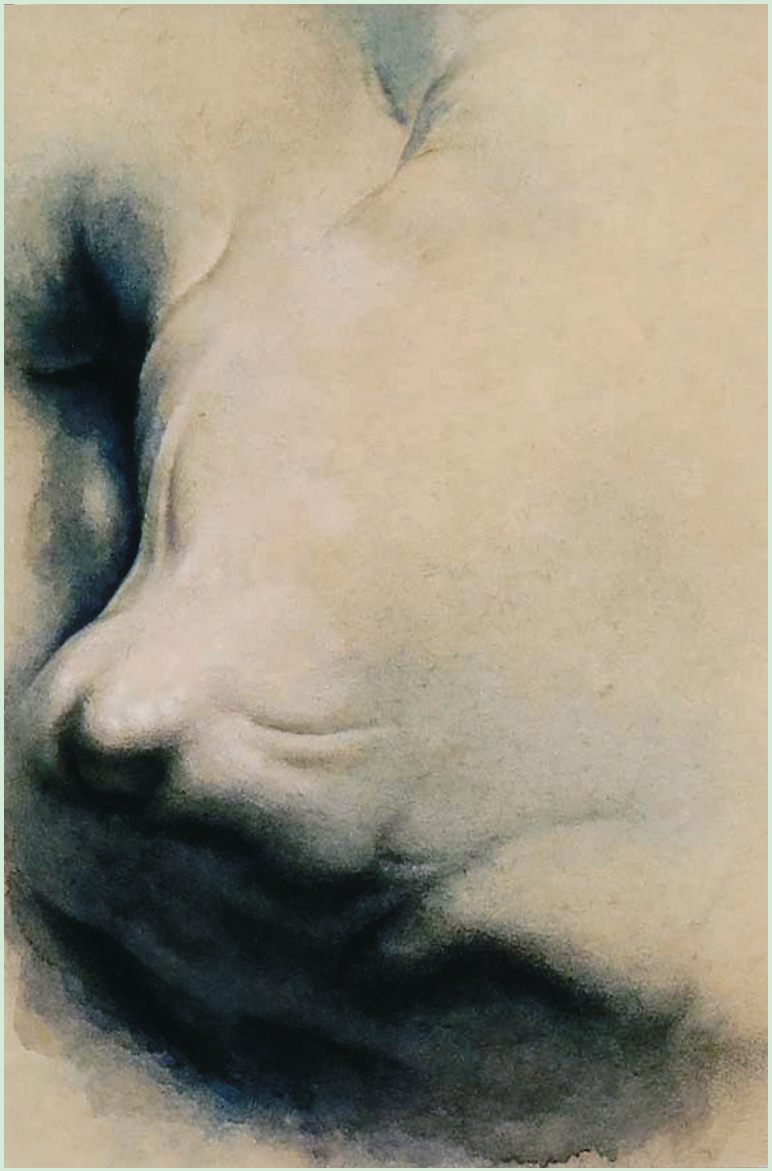


杉木 奈美　　S101220

# まちてくギャラリー 22

東和町
土沢商店街
での日常

花巻市東和町の小さな商店街のそこここに作品の写真で展示をする「まちてくギャラリー」

2017年8月～10月の展示

杉木奈美　松浦延年

松浦延年　　Blue341

「まちてくギャラリー」#21
2017年5月、6月、7月の展示

資料提供
杉木奈美・松浦延年　　展示場所　花巻市東和町土沢商店街 22ヶ所
発行　東和町土沢商店会連絡会　2017年10月　日
企画編集　tonccaci atelier　花巻市東和町田瀬 14–120
菅沼緑　roqu@me.com　　090-9154-5748　toncacci atelier

まちてく
ギャラリー
日常の風景

# 展示の場所

花巻市東和町土沢商店街

岩手県花巻市東和町の土沢商店街の22ヶ所に、はがき大の作品写真を3枚ずつ展示をする「まちてくギャラリー」。

商店の外壁だったり、民家の表であったりしますが、街を歩けばそこにある「美術の片鱗」と隣り合わせにある美術の日常です。

日常のテリトリーにひっそりと紛れ込む非日常の美術でもあります。

# でしゃばりのための進路

## 作家がやることじゃないとは、よくいわれるのですが、ついついでしゃばってしまう、悪い癖について少し言い訳

実は、私自身、何でこんなにイベントじみたことを、次々とやるのかわからないのですが、ほとんど行きがかり上です。その他に、でしゃばりと自己満足なんでしょう。

だいたい、世の中の出来事っていうのは、そんなふうに成り行きでできているのではないでしょうか。

世の中には設計図を描いて、寸分の相違なく淡々と作り上げる、そうい場合も中にはありますが、私の場合、おおよその見当をつけて走り始めると、眼の前の地面に何となく路筋が見えてきて、それをたどっているという風、なのです。

田舎に住み始めたら、山の中で展覧会をしてみたいと、漠然としたイメージはかなり前から持っていました。

東和町に住み始めすぐに、「街かど美術館」というアートプロジェクトのようなことが持ち上がりました。

それに加わり、フタを開けてみると予想以上の反応に皆それぞれが驚いたのです。それが皮切りで、でしゃばり気質に調子づいてしまったのです。

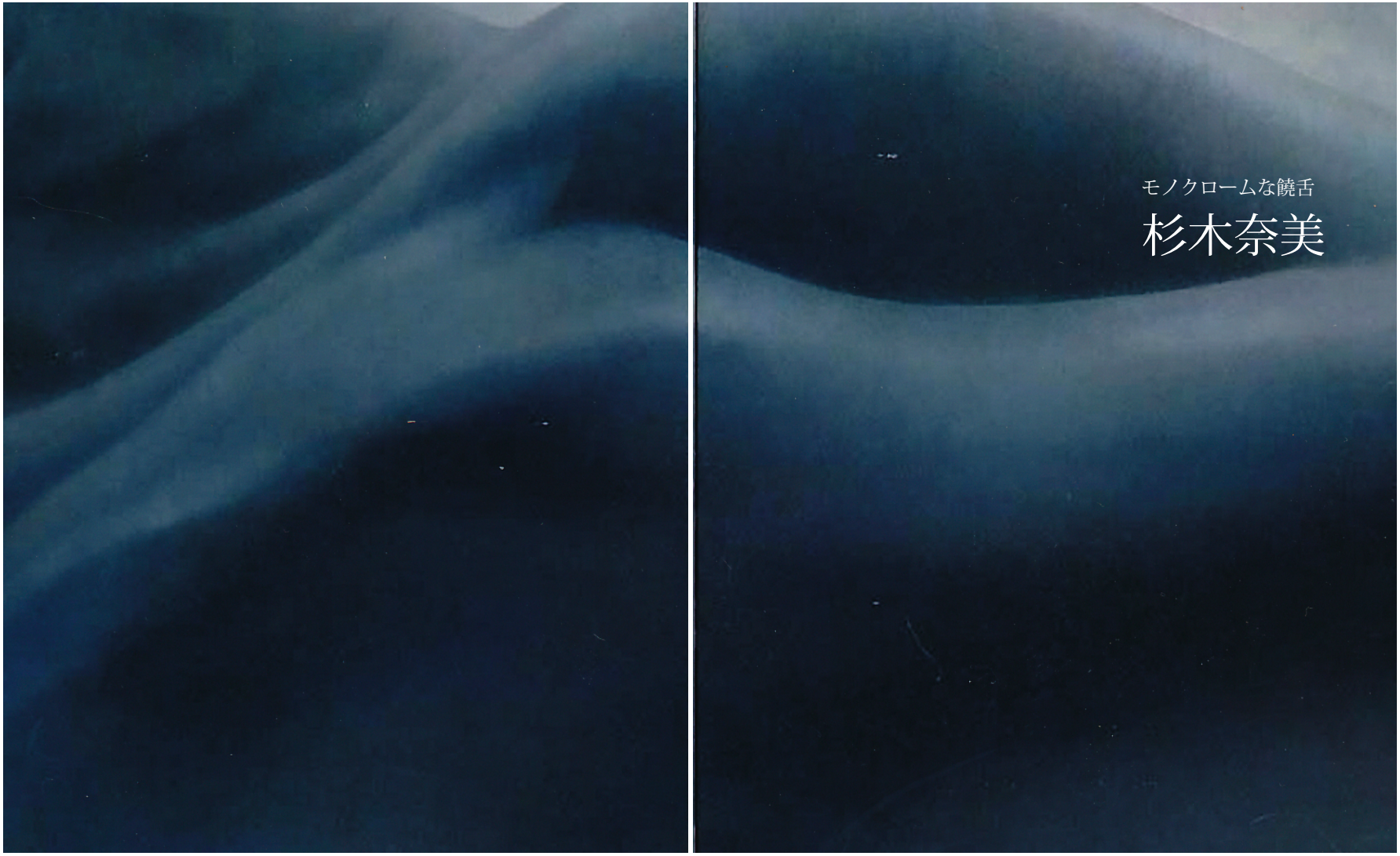
「街かど美術館」は、10年の間に6回しましたが、こうしたプロジェクトは、その期間中はもりあがるけれど、それ以外の普段はほとんど、忘却の彼方で普段の時間に戻ります。

日常とか非日常といっても、そのふたつは切り離して考えることなどできない、裏と表のようなものです。日常の方をもっと考えなくてはいけないと思い、この「まちてくギャラリー」を考えることになりました。

さらにそれだけではどこか足りないと考えていると、今度はこの左のページの写真のように「美術市場」の話が、街の中で盛り上がり始めました。この田舎町で販売に結びつければさらにいいと、です。

ここに至るまでの段階で、「まちかど美術館」があり、「アートクラフトフェア」につながり、それはクラフトが中心ですが、人が作ったものを「このまちで、作った人から直接、手渡しで購入する」という感覚がずいぶん

拡がったという実感はするのです。眼の前の地面に見えてくる道筋のようなものとして、感じるとなれば、背中は押されるのです。「美術市場」は、今年でまだ2回目の試みですが、さらにその先の地面も、これをやっている人たちの間には感じているのです。その先にあるものを、今ここで言うのは少々危なっかしいので、ほのめかすだけですが、要するにこれにかかわる私たちは結構、面白がっているのです。それにしても、これだけ多くの人たちが有形無形に関わりながら走り始めると、成り行きだ、とかいってては、ヒンシュクものかもしれませんが、それでも、設計図があって計画通りに寸分たがわず進むイベントなんて、どんな魅力があるのかなと思いながらも、でしゃばりの功罪、考えながらやっています。




K97000

# モノクロームな饒舌

モノクロームの画面に細長い草の葉がからみあっていて、その奥の暗い部分の陰に潜んでいるかもしれない「未知の体験」へと、これを描く人の興味というか関心が向かっているように感じたのです。

画面の奥のその暗い部分に隠されているかもしれない、イメージという不思議で謎に包まれた体験へと。

絵というものを描く時、その体験の中でおこる想像の推移の中で、想い描いたイメージという抽象を辿ります。それは、一筆ごとに移り変わる画面という具体的な体験へと昇華させることでもあります。

そのイメージという抽象と画面という具体との間をいったり来たりする往復の中で、徐々に何かが形作られるのではないでしょうか。

絵を描くということは、そうやって繰り返されることなのではないでしょうか。そんな気がします。

絵を描くことで、手の動きと筆の感触から伝わる経験の記憶を確認することや、画面として、そこに現れる色と形を眼で見ながら、それでいいのか確かめる。

想像をするということは、そのフィードバックの繰り返しなのではないでしょうか。

それらの繰り返しは、漠然と立ち現れることではあるけれど、そういう一連の動作の結果、現れるイメージが「未知の体験」として画面に確認されたり、消えてしまったりします。

それこそ絵画というものが、抽象から現実の具体としての手応えになって体験される。その繰り返しなのではないでしょうか。

そういうことをだれでも、絵を描こうとする人ならば画面から引き出そうとしているのではないでしょうか。

杉木さんが描く、細長い草の葉が明るく白に溶け込んでしまう光りの中から、あるいは、暗く闇に向かうような藍の中に何かが隠れているのを、いや逆に、隠そうとしているのかもしれません。それとも、それを見つけ出そうとしているのでしょうか。

描画をするということ、それはでき上がりつつある画面と、刻々と筆が加えられて、変化する画面のこちら側から、何かを見つめている自分との会話でもある

H090520-2-

ならば、杉木さんはここで、やみくもにというくらい、非常に何度もそれを繰り返しているように感じました。

そして、そこに現れてくる何かを探るように凝視している鑑賞者としての自分は、きっとどこにでもいる鑑賞者であり、その時は疑似的な画家のひとりになっているのだと思うのです。

そうやって世界を見つめながら、探っている作家としての本人そのものは、暗中模索の不安定で孤独そのものです。鑑賞者としての私は、高みの見物を決め込みながらも不安は隠しきれるものではありません。

さらに、鑑賞者としての私は、そうした結果の画面を見て、その画面の暗い影の中か、あるいは白く溶け込んでしまった光の中に何かを込められているのかもと、直感したつもりになり、描いている人自身が探っている何かを、そこに隠れているのかもしれないとかなり身勝手に思い描きながら、鑑賞者としても直感しようとしているのです。

杉木さんの作品を初めてみたのは、雫石の新里君の「イエロープラントギャラリー」でのことでした。

高さが５メートルもある壁の中間ぐらいに、直接描かれたブドウの房のような青い球体が大きく大胆に占領するように視界に迫ってきていました。

グラデーションのように暗い色調から周囲の壁の色に向かって溶け込んでしまうような、「葡萄」の房が消える周囲に杉木さんの視線が充満しているように感じ、その視線から、私はとても饒舌な印象を持ったのです。

美術だけに限らず、表現するということのもとには、第一人称の視覚があると思います。

私は思います。イメージという抽象を、画面という具体に変換しようとすることが表現なのではないかと。

そして、その表現というものが含んでいる象徴というものは、暗喩を通してそれが初めて成立するのだろうと思うのです。

もちろん単純な比喩にだって、表現は成立するのでしょう。

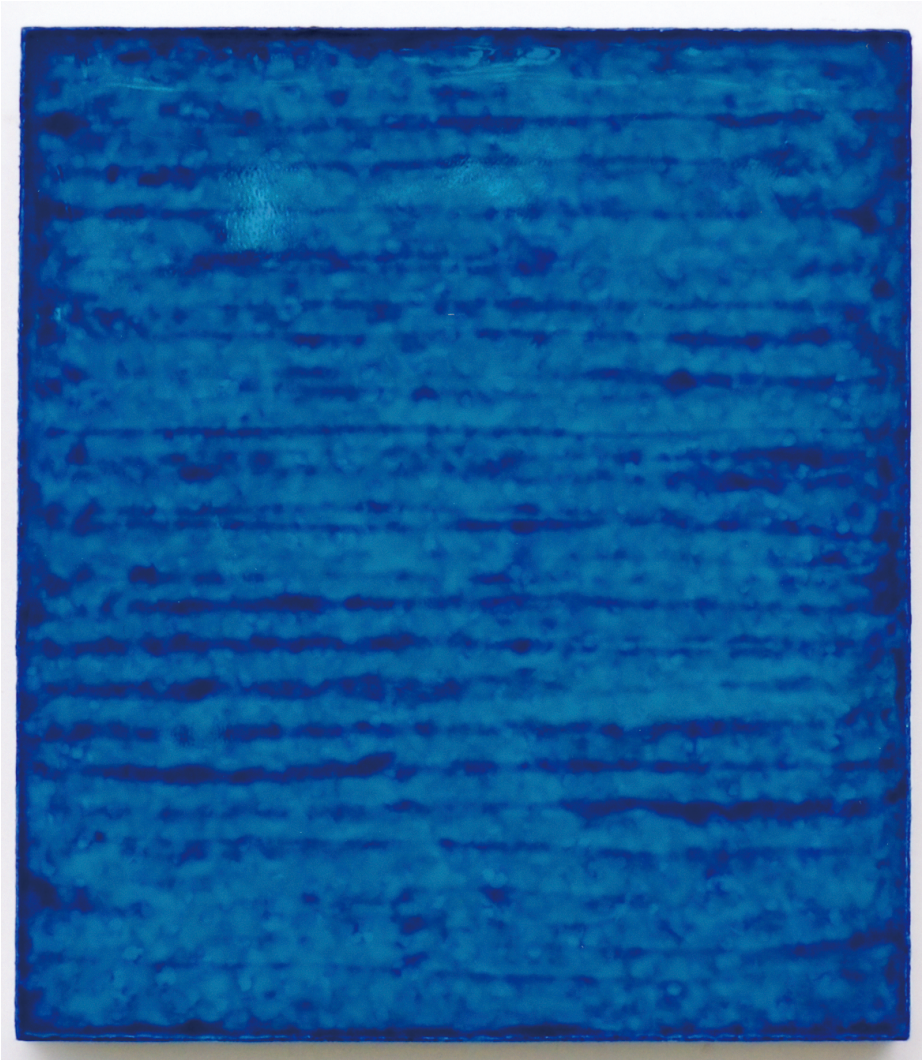
表現の形にはフィルターのよう働きがあって、何かを話すたびに、あるいは何かするごとに、その人の表現フィルターを通過することになります。

きっと、杉木さんにはどこかやはり饒舌な思いがあるのではないかと感じるのです。いっぱいある思いが、モノクロームに濾されて詰まっているのではないかと思うのです。

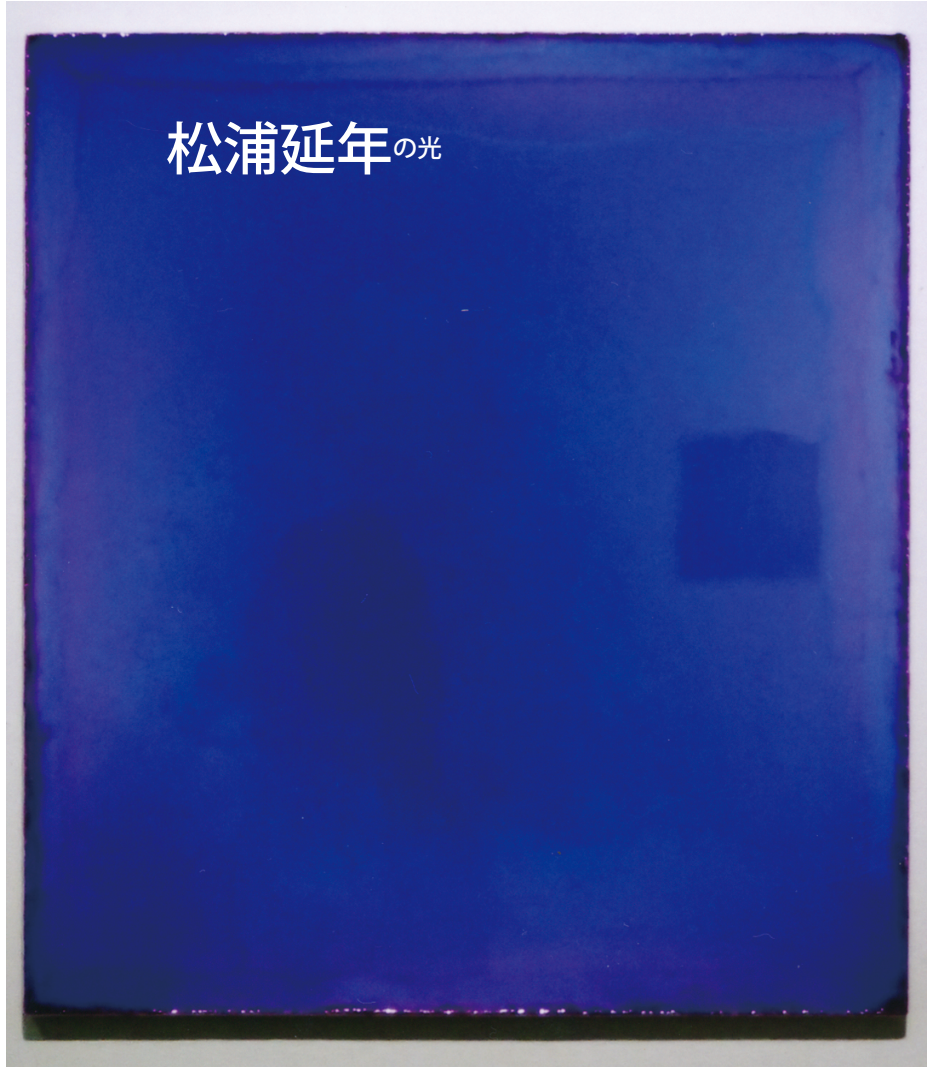
H130815

H090125-0228

S140907



Blue315




Blue340

# 眼で見る

当たり前といえばそうなんですが写真などというものが、どれくらい被写体に近づくことができるかなんて、すごく疑わしく感じてしまう、松浦さんのこれらの作品写真です。

まして、その写真を印刷したところで、ますます松浦さんの作品から眼に映るはずだった事実からは遠ざかってしまうかも知れない、そんな気持ちを持ちながらも作品写真の提供をお願いしました。

松浦さんのアトリエで見たそれは、油絵の具の溶き油の底から、顔料の色合いが沈殿し輻輳する表情で語りかけてくるように私には映ったのです。

そして、それは「見える」ということが私たちにもたらす想像の拡張を幻想の中で（もてあそぶように）、芸術というものを作り上げておいて、さらにそのマッチポンプのような芸術に翻弄されているのが私たちの一般的な芸術家なんではないかと自虐になります。（もちろん一般的芸術家なんていう存在は否定するのです）

日常的に視覚からあらゆる情報を取り込んでいる私ですが、この松浦さんの色を見た時に、想像することは、やっぱり不思議な作用だと思わずにはいられませんでした。

視覚芸術などという言い表し方もありますが、視覚の作用が主体なのではなく、これを見て拡がる想像や、思考の底を掘り下げようとする連鎖を感じて震えるような感覚を覚えます。

油絵の具の技術的なことについては全くといっていいほど、溶き油についての知識も経験もありませんが、ここに現れている色は、油絵の具の溶き油と顔料が分離して沈殿しているような印象を受けるのですが、実際のところはわかりません。

その油の下に沈殿した色が発する情報に、色ってなんだ？その情報ってどういうことか？という疑問が次々とかぶさってきて、混乱するのですが、その前にきれいだと思ってしまうのです。

絵画は、色を筆で塗ることで始まりま

Blue364

すが、しばしば、色を並べるパレットの上に塗られては、ふき取られた絵の具の痕跡が積み重ねられた時間の経過がすごく寡黙に語り出すことに驚きます。

キャンバスにもさることながら、乗せては削られ、ふき取られることを繰り返したパレットのもたらす、行為の蓄積のような空間に魅力を感じたりすることです。

松浦さんの作品も、絵の具を溶いた溶き油を乾燥させるのに、細心の注意を払いながら時間をかけて、乾燥させているのでしょうが、これもやはり、時間が蓄積する、色の変化なのでしょうか。

経年変化とかいって、古びたものの劣化にも、それなりの時間と共に変化する表面と、劣化以上に、そこに蓄積したストーリーやイメージを抽出しようとすることも沢山あるのだと思います。

それは時間というものがもたらす作用だし、意図とは別に存在してしまうものなのかもしれません。そうだとしても、そこに現れてしまう時間と空間に見えてしまい、感じてしまうことが不思議でなりません。

見えて感じるから想像するのか、想像するから感じ、また見えることになるのか、私には区別することができません。

見えて想像する、想像するから見える。それらを区別する必要はないのかもしれません。少なくても今のこの段階では。

見えない作品というのもあるし、見せないものもあります。さらには作らない作品もあります。

見えるから感じ、想像をする。白い紙に横棒を引くと、水平線と感じ、四角く囲めば量を感じる。さらに形を重ねれば、遠近を感じます。

ひとの想像力は紙の上に引かれた、線だけでも連想をもよおす、というかもよおしてしまう、しょうもない習性をもたらしたところから始まるのでしょうか。

それとも、象徴を設定することで始まったのでしょうか。既に、そのような習性を持ち始めて膨大な蓄積を受け継いで来た私たちは、この両刃の剣のような想像力から逃れることなど到底できないのだから、死ぬまでこれを利用するほかはないのでしょう。

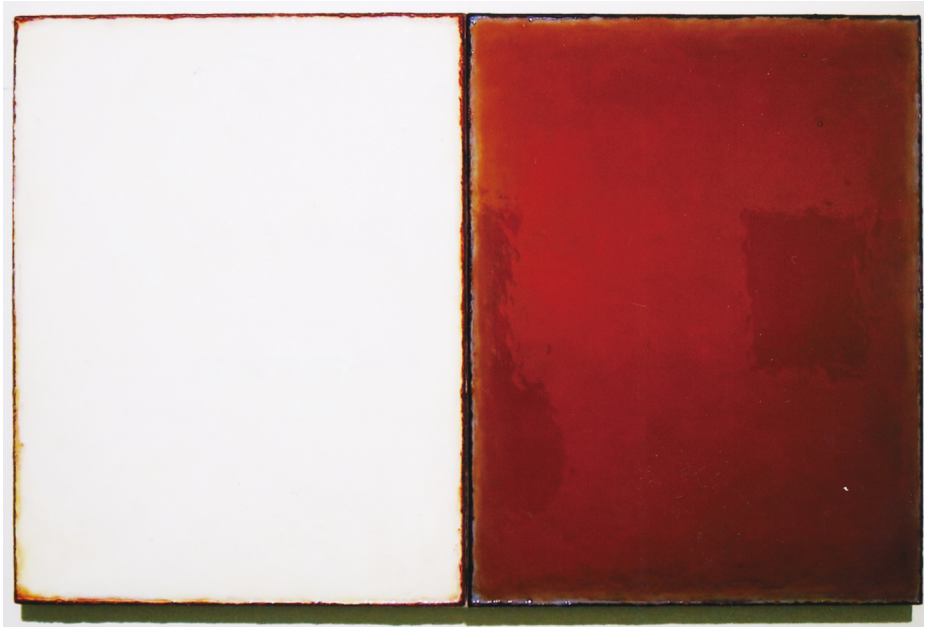
松浦さんのこれらの作品がどれほど透明であっても、透明の中には限りなく不透明な事実が重なっていると思うのです。

それらの事実は見るという事実から始まるし、作り手としての松浦さんにとっては、作業をするところから端緒が始まるのでしょう。

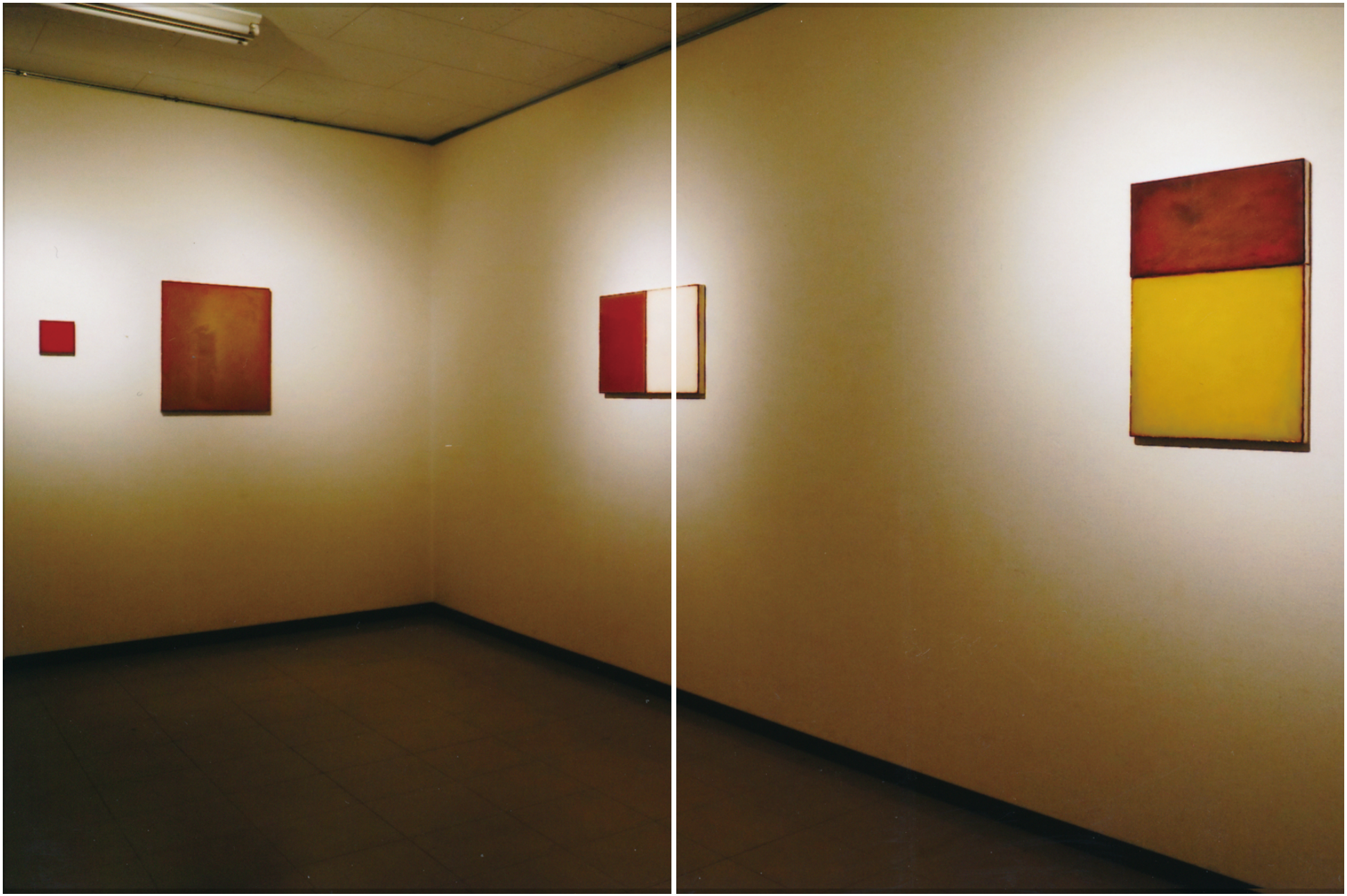
見ることが識別するだけではなくて、何かに似ていると思うことから始まるのだろう、イメージの物凄さを思っています。

Brown276

yellow 206



Brown392



2015　ギャラリーぜん（秦野市）

## 後　　記

前号で皆さんに協賛のお願いをしたところ、9月末で合計22万円のご好意が寄せられ、少なからぬ後押しに感謝申し上げます。

その後、この「まちてくギャラリー」の窮状が岩手日報紙に取り上げられて、「応援をしている」との言葉が添えられ、このような小さい活動にはなかなか得ることができない、もうひとつの応援を得て、これもとても身に染む出来事でした。

さらに、この事業を主催している東和町土沢商店街商店会連絡会も継続実現に向けて動き出すなど、この活動に期待も寄せられているものと心強く感じました。

こうした活動が、補助なしに自立することが本来の形だと思います。さらにこの活動を拡げるためにも、どうぞこれからの活動にも、継続して協賛をお願いします。ありがとうございました。